

伝染病対策

一昨年、国内では26年ぶりに豚コレラが発生した。1年余りのうちに1府8県に広がり、養豚に大きな脅威となっている。牛の脅威は口蹄疫だ。

豚コレラも口蹄疫も人に感染しない。それだけに一般の人

の認識は低く、意図せず人が

感染を広げてしまう。

但馬牛をまちかで見て、触

れ合える牧場公園にとって、

伝染病対策は実に頭の痛い問

題だ。来日あるいは帰国後1

週間以内のお客さんは畜舎へ

の立ち入りをお断りし、畜舎

に入る際には靴底消毒してお

らっている。しかしこれ是最

低限の措置で、内心ヒヤヒヤ

だ。万一一このような伝染病が

侵入すると、飼っている牛を

全て殺し、エサや敷料等の資

材も皆処分しなければならな

い。さらに、近隣の畜産農家

豚コレラも口蹄疫も人に感染しない。それだけに一般の人

の認識は低く、意図せず人が

感染を広げてしまう。

但馬牛をまちかで見て、触

れ合える牧場公園にとって、

伝染病対策は実に頭の痛い問

題だ。来日あるいは帰国後1

週間以内のお客さんは畜舎へ

の立ち入りをお断りし、畜舎

に入る際には靴底消毒してお

らっている。しかしこれ是最

低限の措置で、内心ヒヤヒヤ

だ。万一一このような伝染病が

侵入すると、飼っている牛を

全て殺し、エサや敷料等の資

材も皆処分しなければならな

い。さらに、近隣の畜産農家

に移動制限がかかるなど多大な迷惑をかける。

種雄牛を飼つて人工授精用の精液を供給する試験場となる、但馬牛の存続に関わる重大事だ。伝染病の侵入は絶対に許されない。

兵庫県は機能分担による効率化と県民に開かれた研究機

関を目指し、試験場を整備し

てきたが、平成22年、富崎で

発生した口蹄疫により、この

方針を少し変えた。この時、

口蹄疫は急速に広がり、全国

的な拡大も懸念された。

当時、精液供給と種雄牛づ

くりを機能分担し、種雄牛は

畜産技術センター（畜技）、

種雄牛候補の雄牛とその能力

を測る検定牛は北部農業技術

センター（北部農技）で飼つ

ていた。

まずやつたのはリスク分散

だった。種雄牛と精液の一部

を北部農技に移した。



地域の宝

但馬牛物語

★55★

しかし県民に開かれた試験場の牛舎は、見学しやすいよう開放的だった。エサや資材を運ぶトラックが牛舎のそばまで入り、受け入れる構造で、畜牛舎の向かいに農業大学校（農大）の実習牛舎があり、人の行き来を遮るのは難しかった。消毒層を置いて、工事用バリケードで仕切り、立ち入り制限しても気休めに

種雄牛を守る。これを最優先に、大改造を行った。畜牛舎エリアの内と外で使う機械を分け、エサや資材は専用ゲートでおろし、消毒後牛舎に運ぶ。検疫舎を作り、試

験場外から来る牛は、エリアに移し、農大及び畜技、北部農技の牛舎エリアをフェンスで囲う。畜技と北部農技の牛舎エリアは、職員を含め、全てエアーシャワーを浴び、消毒噴霧を受け専用の着衣に着替えない入れなくし、見学は受け入れないことにし

て、牛舎に入ることにした。山に囲まれて守りやすい北部農技に種雄牛の主力を置いて、畜技と北部農技の両方で精液採取業務を行い、牛の出入りが多い検定牛は畜技に移し牛舎改造をした。玉つきで牛を移動させながらの工事だつたので時間がかかったが、平成30年に無事完成した。

ところが伝染病対策ができるようになった。このため試験場は種雄牛の様子を動画に撮り、ネット配信する準備をしている。

牧場公園は試験場のような対策を取れない。牛の健康に細心の注意を払いながら、お客様に但馬牛を身近に感じ、理解してもらえるよう努めるしかない。



伝染病対策が徹底された北部農業技術センター

■筆者プロフィル■

わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

牧場公園は試験場のような対策を取れない。牛の健康に細心の注意を払いながら、お客様に但馬牛を身近に感じ、理解してもらえるよう努めるしかない。